

近況まとめて報告



haskap

NEWS LETTER

～コモンズの現地から発信する～

勇払原野のSPIRIT

コモンズの視線 勇払原野と付き合いが始まってからちょうど50年が経って、地域開発とはこれだったのかと気づかされる場合があります。かつて、「国家的なプロジェクトは規模が大きく、当時でも小さな自治体は吹っ飛ばされる」と聞かされましたが、先行した西港をあわせてみると、苫小牧を中心とした地域開発がいかに大きな事業だったかがわかります。この間、世論は推進論だけでなく反対論も目立ち、メディアも否定的な論陣を張りました。ぜひ今、地域開発の視点で節目の総括を試みてほしいところです。

一方、苫東開発のスタート時に本州以南で露呈した数々の公害に対処して、緩衝することを目的に計画された緑地は、静かに保全されつつ、目下、経済や時代の流れの中で新しい出番を待っているように見えます。放置もよし、利活用もよし。苫東の地域をも勇払原野の風土の一角として共有すると考えてきた一住民として、計画時点とは違った、予想もしていなかった姿が見えています。本ニュースレターでは雑木林とハスカップのコモンズに頻繁に出入りするものの目から、現状を報告します。(草苺)

参考 web [地域活動15年とこれから](http://hayashi-kokoro.com/commons00.html) <http://hayashi-kokoro.com/commons00.html>
[雑木林だより](http://hayashi-kokoro.com/zouki00.htm) <http://hayashi-kokoro.com/zouki00.htm>
[雑木林&庭づくり研究室](http://hayashi-kokoro.com/) <http://hayashi-kokoro.com/>

Topic 1 このままではミズナラ・コナラ林が更新されない？看過できないシカの食害



雑木林におけるシカの食害が深刻である。

苫東地域では環境アセスメントにおいて、群落としては日本の北限とされるミズナラ・コナラ林を、保全すべき樹林地として指定しているが、天然更新しようとする芽や若木はほとんどすべてシカの食害にあって成木になれない状態が続いている。ただ昭和50年代後半に造林されたミズナラは食害を免れていることから、原因はその後の生息数の急激な増加とそれに伴うエサ不足と考えられる。

静川の小屋の周りでも、更新した萌芽枝は壊滅状態で、徐間伐した枝(新芽)すら冬の間の格好の餌となっている。試みに小屋にトレイルカメラを設置(2026/1～)すると、上の画像のように数頭のシカが夜間落ち葉の下や枝先をしきりについばんでいるのが確認される。電気柵を使用することで天然更新は問題なく可能になることは、平成30年に(株)苫東から受託した「苫東地域内森林追跡調査」の報告書に詳細を明らかにしたが、現在のところ、ミズナラ・コナラ林の効果的な更新手法は柵以外では手探り状態のままである。苫東コモンズでは、平成6年、大島山林に新たな小面積皆伐地を設け、電気柵を用いない天然更新の可能性を継続観察している。

Topic 2 柏原のハスカップ自生地が目立つ枯死

国内では最大と目されるハスカップの自生地が、あいつぐ枯死により存続が危ぶまれている。

直接的な原因は不明ながら、いくつか想定されるうちの

ひとつは、ホザキシモツケの繁茂による被圧で、その原因は水位低下である。中央部を南下する柏原幹線排水路の水位が低下し、湿原に給水する環境維持水路も水位維持の機能を果たしていない。このためかつてはハスカップの実生が観察されたミズゴケのこんもりとした小丘も枯れて実生が見つけれなかった。



もう一つは、ハスカップの寿命である。自生地一帯では根元直径が最大50mmあまりの個体が散見され樹齢は50年程度と推察された。栽培地でも、一定の年数を過ぎると樹勢が衰えることから適期に株を切り戻して再生を促して生育させている。

湿地の乾燥化は供給水の減少が最も大きな要因と考えられるが、特に安平川の治水が成功したことによって、大雨によって一帯が長期間冠水することがなくなったことが背景としてあげられる。早来町史によれば明治31年から昭和60年までの80年余りの間に20回近い大洪水が記録されており、柏原のハスカップ自生地もしばしば滞水状態になって、一方的な乾燥化を免れ遷移を止めてきたことは想像に難くない。

苫東コモンズでは、柏原のハスカップ自生地こそ「北海道遺産」にふさわしいのではないかと考え、ハスカップサンクチュアリという名称を与えて植生の変化について調査を行い、勇払原野の市民史『ハスカップとわたし』を発売したが、今後とも消長を見守ることとしたい。

Topic 3 小屋周りの里山風景を改善

苫東における広葉樹林は、明治後期以降、繰り返し燃料用薪炭として採取した萌芽再生林でナラ類が優先しているが、保育によっては日本人の心のふるさと・里山景観を呈するとして一部で注目されてきた。



2025/秋に改修したサインと雑木林の冬の風景



2026/5 に実施した保安林の枯死木・倒木処理作業

特に平木沼の緩衝緑地の萌芽再生林の修景（徐間伐）が平成2年にスタートし、一帯の保育の中心として平成9年に雑木林ケアセンターが建設されたこと、さらにそこを拠点とする修景作業やイベントが行われ「ひと気」がつくようになってから、周辺が里山化され景観の向上に向けた動機づけになったことが大きな要因である。

令和5年から雑木林センター周辺の里山景観向上にさらに注力することにした。その一環で隣接するカラマツ保安林の枯死木・倒木の処理を開始し、今年5月には苫東コモンズのきこり班10数名も参加して、掃除伐を実施した。まだ醜い状態をやっとゼロに戻した段階だが、平木沼方面に継続して修景を図っていけば一帯の風景は次第に別天地型雑木林のように大変化することは間違いない。

Topic 4 ヒグマの移動経路は変わった



上の画像は2026年6月25日現在の、苫小牧と周辺のヒグマ出没情報である。中央部に加筆した茶色2か所は市

街地等で発見された民間情報である。近年は市街地に出没するヒグマが増えて懸念されているものの、今年は現在までほぼ錦岡方面、道央道中央インター付近に限られている。下の図（平成31年）に比べると今年は苫東にヒグマが出没していないのがきわめて大きな特徴である。



この背景には、ヒグマの移動がウトナイ湖から苫東方面に向かっていたのが、企業の立地などによって経路が変わってきたことが推測される。とりあえずは苫東地域就労者の出会いがしらの事故や林内活動の安全のために出没情報に留意し、ヒグマほか野生生物の動きの変化に十分目を向けておきたい。

編集後の書ききれなかった雑話など

■大島山林の地道な徐間伐作業は着々と進展、フットパスも6月に1回目の刈払いが行われた。5/16 日本野鳥の会の協力の元、恒例の探鳥会を実施したが、事前情報では最近林内でエゾモモンガが見つかったとのことで、双眼鏡をもった愛好者も出入りしているようだ。■「寂しすぎて職員の安全に自信が持てない」、これは昭和60年ころ、柏原への企業立地を見合わせたある経営者の弁である。時の現地のトップは「ひと気」を付ける作戦として公園を整備して市民を誘致する策をとった。車が絶えない昨今の柏原との落差たるや、まさに昔日の感がある。■新緑が始まって間もなく、暗くなるはずの林が再び明るくなった。芽吹いたばかりの新葉がマイマイガ等によって食害され始めたのである。調べてみると苫東地区のミズナラ・コナラの被害が際立っていて林縁部では枯れ木のようにみえている。が、6月下旬には新しい芽吹きによってリカバー。自然は放置しても枯れず回復する、この力がなにより頼もしい。■室蘭本線の遠浅は昭和の初めころだったか日本一の薪炭出荷駅だったという。空知産の石炭もここを通過して室蘭港や苫小牧港から本州に運ばれた。そして今も北電の開閉所やメガソーラーがあり、苫東は今、厚真火発も含め北海道の最重要のエネルギー地だ。その苫東で「苫東GX HUB構想」が動いていて、国交省、道、苫小牧市、DBJと(株)苫東が取り組んでいる。資料のサブタイトルには「立地するだけで脱炭素可能な産業地域へ」とある。PPA、卒FIT、再エネマイクログリッドなどあまり耳慣れない文字が見える。CCSならぬCCUSのUは二酸化炭素の注入だけでなく利用も、らしい。再エネの近年の先端的な底動きだろう。その一角で苫東コモンズは森林の手入れによってCO2吸収で参画し、最も原始的な再生可能エネルギー「薪」も生産している。体系が読めた。■思うまま雑話を書いてきて、リードの「地域開発」という意味に戻った。好むと好まざるにかかわらず、コモンズもその一翼を担っていることになるのは不思議な気がする。世の流れ、底流れ、歴史、ポスト開拓期、様々な言葉もよぎる。(草莉)

e-mail kt-884-556@nifty.com 携帯 090-6999-2765